

書評

福山泰男著

『建安文学の研究』

林 香 奈

建安文学は、文学史上の一つの画期と捉えることができ
 るであろうし、そのように評される所以のいくつかを指摘
 することはあるいは容易かもしれないが、個々の現象の由
 来や継承関係、あるいはその原因を具体的に説明すること
 はなかなか難しい。漢代の文学、あるいは正始・西晋の
 文学と建安の文学がいかに接続し、どのように位置づけら
 れるのかという問題を「女性・少年・国家」という視点か
 ら検討を試みたのが本書である。まず本書の構成を示そう。

序章 小著の目的と対象・方法および概略

第一章 張衡「四愁詩」をめぐる

——艶情の文学とその機能——

補説 張衡「論貢拳疏」辨誤

第二章 趙壹の詩賦について

第三章 後漢末・建安文学の形成と「女性」

第四章 建安の「寡婦賦」について

——無名婦人の創作と詩壇——

第五章 曹操「十二月己亥令」をめぐる

——文学テクストとしての「令」——

第六章 曹植の四言詩について

第七章 曹植の「少年」

第八章 曹植「白馬篇」考——「游狭兒」の誕生——

第九章 曹植と「国難」——先秦漢魏文学における国家

意識の一面——

第十章 「悲憤詩」小考——研究史とその問題点——

第十一章 「悲憤詩」と「胡笳十八拍」

——蔡琰テクストの変容——

附章 嵇康の「述志詩」

——建安文学の集成として——

総論とも言える序章では、建安文学研究における問題点
 を挙げている。その一つが、「時代区分に十分な根拠にも

とづく通説がない」こと。次いで、「建安の風骨」のような建安文学を性格づける概念の定義あるいは是非について定論がない」こと。さらに、後漢文学と建安文学との連続性に着目する考察が十分になされていないこと。以上の点を整理しつつ、本書では建安文学の逸脱性は後漢にその萌芽を認めることができるのではないか、後漢から魏晋への文学の変容を辿る中で、建安文学をどう捉えるか、といった問題について考察する旨が示されている。

一瞥してわかるとおり、前後の時代との接続を明らかにしようとする意図を反映し、建安文学を中心にほぼ時代順に論証が進められているが、以下、福山氏自身が序章で本書の中心的テーマとして提示している「女性・少年・国家」というキーワード（二七頁）に即して、筆者の私見を添えながら、福山氏の見解をたどってみたい。

二

まずは、後漢・建安文学と「女性」をテーマにした考察に含まれる第一章、第三・四章、第十・十一章についてその概要を紹介しよう。

第一章「張衡「四愁詩」をめぐる——艶情の文学と

その機能——」は、まず張衡「四愁詩」の序文に記される「鬱々として志を得ない」という張衡の官界における挫折による憂いの心境を具体的に裏付ける記述が、序文以外に見いだせない点を指摘する。さらに張衡の生涯を辿っても「譏邪・忠誠」という単純な図式を見いだし難いことから、つとに指摘されているとおり、序文は後人の偽作とする立場を福山氏もとる。

その上で、傅玄が「擬四愁詩」序で張衡作を「体小にして俗、七言の類なり」と評したこと、張衡「四愁詩」は男女の情愛をうたう民間歌謡的性格を帯びていることなどから、福山氏はこの詩を情詩とみる。それは、序文を収載する『文選』がこの詩の「愁」を政治上の憂愁と捉えている一方で、序文を収めない『玉台新詠』では卷九の歌行にこの詩を収めることも符合する。このように文人が男女間の恋情・艶情を創作のテーマとするようになった理由の一つに、受容の場である宴席での歌唱との関わりが考えられるとし、張衡「四愁詩」も楽曲をともなう情歌とみることが可能であるとする。さらに張衡の場合、『易』の陰陽思想を世界観の根底に有していることも関係しているとし、「四愁詩」は士人が男女の情愛を詠みはじめの先蹤であるとしている。

補説「張衡「論貢拳疏」辨誤」では、後漢後期の文学的環境について考察している。選挙制度の欠陥を論じるこの一文は、『通典』では張衡の上奏文として収載するが、『後漢書』では蔡邕の文とされている。「書画辞賦」「当代の博奕」の才芸は政治能力とは無関係であるとの主張は、そのような才芸をもつ者こそが登用される当時の官僚人事の実態、具体的には靈帝時代の状況を指しているとして、蔡邕の奏上とみるのが妥当とする。またこの一文からは、後漢後期の文学がもつ「既成の因襲からの逸脱への傾き」、つまり「漢末靈帝の俗文学重視」の傾向を見いだすことができるとする。さらに、張衡と同時代の王符も同様の主張を展開していることから推して、張衡もすでに同じような文学環境に置かれていたとして、第一章の情詩説を補強している。

第三章「後漢末・建安文学の形成と「女性」は、女性の名を冠した文学創作が、後漢の和帝時に活躍した班昭の頃より現れることから説き起こし、漢末魏晉、特に晋代の女性作家の存在が目立つこと、並行するように女訓書も著されるようになることから、女性の行動や言説が注視されはじめた、あるいは女性自身が着目しはじめた可能性を推測する。

その上で、班昭、秦嘉の妻徐淑といった後漢中・後期の女性が、文学作品の享受者であると同時に、制作者でもあったこと、また曹丕・曹植の母である卞后が倡家の出身であったことなどを挙げ、後漢末から建安の文学の形成・展開に「女性」が関わっている可能性に触れている。さらに第四章で論及される丁廙の妻「寡婦賦」、第十・十一章で詳述される蔡琰「悲憤詩」の例を挙げ、後漢末から建安の詩賦に描かれる女性は、女性の一人語りや女性視点からの描写など、「身近な対象を描こうとしている点で、樂府や古詩の一般化・抽象化された女性像と隔たりがある」としている（九六頁）。

第四章「建安の「寡婦賦」について——無名婦人の創作と詩壇——」では前章を受けて、丁廙の妻の作とされる「寡婦賦」を中心に、建安文学における「女性」が「表現対象としてだけでなく、創作の担い手として文学史に位置づけ」られるかどうかを検討している。この賦の作者は丁廙の妻、丁儀の妻、丁儀と従来見解が分かれている。『隋書』経籍志に丁廙・丁儀の妻の別集は記録されていないものの、後漢末から建安時代に少数ながら無名の女性が著述活動をしていたことが窺われること、丁儀の作とする積極的根拠が見いだせないことから、氏は丁廙の妻の真作と仮

定した上で、その意義を追う。

「寡婦賦」は阮瑀の死後、曹丕がまず創作し、王粲らにそれを踏まえて詠じさせたものだが、これらの作には従来の詩賦には見られない「母性自体の情愛表現」や「母自身による語り」によつて、母子の姿が新しい題材として描かれるという共通した特徴があるとす。さらに王粲らの同題の作に比べて丁廙の妻の作がもつとも亡失が少なく原型に近い形で伝えられていると思われること、建安の「寡婦賦」を踏まえて書かれた西晋の潘岳による「寡婦賦」が、李善注に従えば、その多くの句を丁廙の妻の作をふまえていることなどから、丁廙の妻の「寡婦賦」が「後代の作家が依拠すべき建安文学の規範の一つともなつてい」た可能性を指摘する（一二四頁）。こうした現象の背景には、建安になると詩人たちは儒教的価値の桎梏から離れ、従来、忌避・抑圧される者という儒教的観念の枠組で捉えられてきた「寡婦」のように、抑圧された「女性」の存在だけでなく、その心情そのものに目を向けるようになるからであるとし、丁廙の妻が「寡婦賦」会詠の場に参加した可能性も氏はあらためて指摘する。

第十一・十一章では、第三・四章で考察した後漢末・建安文学と女性との関わりの問題を、蔡琰の作品を対象に検討し

ている。第十章「悲憤詩」小考——研究史とその問題点——では、「悲憤詩」に関する先行研究についての論点を整理し、各説の問題点を明らかにしている。まず、「悲憤詩」真偽論が中心であった一九五〇年代以降の主たる研究成果として、戴君仁・余冠英・張少康・郭沫若など二十三名の論考をまとめている。次いで、一九九〇年代以降は、史料や真偽問題から切り離れたアプローチが行われるようになり、悲憤詩を作品テクストとしていかに分析するかという具体的な検証が始まつたとし、黄嫣梨・余志海・富谷至・川合康三各氏の説を紹介する。その上で福山氏は、「悲憤詩」偽作説をとるものは総じて根拠が薄弱であること、文学史の通説となつている余冠英氏の騷体偽作説もいまだ十分に検証されてはいないとして、創作者としての蔡琰ら女性を文学史に位置づけなおす余地が残されていることを示している。

第十一章「悲憤詩」と「胡笳十八拍」——蔡琰テクストの変容——では、真偽の検証のみに帰着させることなく、蔡琰二作品の差異、その示す意義、特質などを明らかにしている。氏が真作とみる「悲憤詩」には、母性や「家」に対する観念が詠み込まれているとし、女訓書を残した蔡邕の影響の可能性を指摘する。一方、「胡笳十八拍」には悲

憤詩にない「漢・胡」中心・周縁の二元的世界」が描かれ、「家」に関する観念は希薄だとする。従来「胡笳十八拍」に描かれる南匈奴の漢への侵攻と和戦という事実が史料に存在しないことが、偽作説の根拠の一つとされてきたが、それに加えて、この作品に現れる漢への国家意識は曹操政権下では曹植以外の文学作品には見られないこと、蔡琰作と同様の内容をもつ唐の劉商の「胡笳十八拍」の成立に関し、蔡琰作品への言及がないことはいよいよ真偽を疑わせるとする。さらに蔡琰と「胡笳十八拍」そのものを直接結びつける資料は、六朝・唐代には存在しないことを検証し、通説となっている「胡笳十八拍」偽作説を再確認するとともに、劉商の作をもとに蔡琰に仮託して作られたのが「胡笳十八拍」ではないかと推論している。

蔡琰の両作品間に見られる「様式・表現・内容・思想の食い違い」は、真作と偽作との違いに由来するものであり、胡兒と引き離される母を詠む「悲憤詩」と、母子関係から胡漢の対立関係へと展開していく「胡笳十八拍」作品群とでは、蔡琰像も「一女性の悲境から國家の悲劇の象徴」へと変容しているとする。

以上、氏が第一・三・四・十・十一章と約半分の紙幅を割いて検討している一つのテーマ「建安文学と女性との関わり」

については、実際に不明な点が多い。建安文学に多い女性の叙述については、女性の口吻をかりて自らの心情を詠んだと説明される場合がほとんどだが、なぜそうしたテーマや題材・手法が選ばれるのか、あるいは本書で対象としているような女性自身が作者とされるものは、仮託なのか真作なのか、真作とすればなぜそうした作品が出現してくるのか、という問題は依然として十分な考察がなされていない。それは女性に関する記述が少ないために、検証には限界があり、推測の域を出ないためでもある。

本書ではその問題を敢えて検証しており、第一章では張衡「四愁詩」を士人による情詩の先蹤とし、その生まれる要因として、宴席での歌唱のほかに、『易』の陰陽思想に基づく世界観を張衡が有していたことが関わっているという興味深い指摘をしている。第三章では、班昭をはじめとする女訓書の盛行や女性による文筆活動がいくつか確認されることなどから、女性による創作の可能性を示唆し、第四章では具体的に「寡婦賦」を丁廙の妻による作品と見る可能性にも言及しており、新しい視点を提示する点では興味深い。ただ、第一章について言えば、張衡個人の問題としては説明がつくかもしれないが、その後が続く作品も含めて、氏の問題意識としてある「後漢末から建安への連接」

を明らかにするという点では、十分説明されているとは言えないであろう。また女訓書の盛行に伴って、女性による著述や女性を題材とする作が後漢以降増えていく可能性は、氏の指摘どおり確かに考えられるであろうが、そもそも女訓書がなぜこの頃から増えていくのか、という問題は残されよう。

この点について筆者の私見を少しく述べれば、漢代特有の制度との関わりは考えられないだろうか。保科季子氏の論証によれば、⁽¹⁾「漢代の女性たちは高級官僚から庶民層にいたるまで、基本的には「夫婦一体」の理念に基づき、夫を介して皇帝の直接的恩典である牛酒の賜与にあずかり、その支配に包摂されて」おり、「皇后に「天子の后」として皇帝とともに陰陽を調和する役割が期待されるようになる」と、陰である女性には皇后によって統括されるべきとの認識が生じて「きたという。後漢初期には、「皇后は皇帝の対偶としての権威を確立させ」、「皇后—官僚の妻」という君臣関係を理論的に裏付ける「命婦」という概念を創出したという。その「命婦」の概念に「卿大夫の妻」という意味づけをしたのが和帝・安帝時代に盛行した『周礼』解釈における鄭衆の説であるという。本来「大夫の妻」の意である「命婦」が、「卿」や「士」の妻と拡大解釈されて

いくのも、早くは前漢末の劉向から後漢以降のことであり、後漢には「皇后との君臣関係は高級官僚の妻に限定されず、良民男子の妻たる良民女子にまで及」んだと言及されている。

班昭が活躍したのは和帝・安帝の時期であり、皇后を中心とした女性秩序の確立時期と符合している。保科氏によれば、前漢の文帝以来、宣帝期に急増した民爵賜与の際に付随する「女子百戸牛酒」賜与は、皇后の権威の十分に確立していない段階において、「夫婦一体」の理念に基づいて「皇帝の恩徳を直接女性たちにも及ぼそう」としたものであるが、それが後漢和帝の直前の、章帝元和二年（八五）を最後に行われなくなるといふ。これらを併せ考えると、後漢の和帝・安帝の時期に至って、皇帝（男性・陽）の対偶としての皇后（女性・陰）の権威と秩序が確立したが故に、女性に対し明確に陰陽の別を述べ、教育する必要も生まれたとは考えられないか。また保科氏の指摘どおり、この体制がひろく良民層にまで浸透していたとすれば、女性の問題を男性の問題に準えて、より身近なものとして捉える発想も生まれてこよう。張衡も和帝・安帝の頃に生きた詩人であり、とすれば福山氏の指摘どおり、士人が男女の情愛を詠みはじめる先蹤として張衡を捉えることは妥当で

あろう。⁽³⁾

また「棄婦」というモチーフは『詩経』にすでにあり、「棄婦」を借りて放逐された臣下の情をいう例は『楚辞』にも見られる。だが、こうした女性形象（「棄婦」「出婦」「寡婦」など）が後漢から建安の文学には特に多く見られるようになり、福山氏が採り上げた会詠以外の作でも、たとえば曹植が「浮萍篇」や「棄婦篇」などの作で自らの不遇を棄婦になぞらえるのは、漢以来の「夫婦一体」の理念が浸透していたからこそ敢えてそれによる効果を狙ったのかもしれない。

さらに「寡婦賦」は西晋の潘岳によっても制作されていることは福山氏が述べるとおりだが、それ以降、同様の作は姿を消し、梁の張纘「妬婦賦」、先唐の劉思真「醜婦賦」といった特殊な例が見られるだけになる。先の保科氏の論では、前漢文帝以来、皇帝の籍田儀礼と対を為すように行われた皇后の親蚕儀礼では、皇帝の御者である太僕の妻が皇后の御者を務めており、これも「夫婦一体」思想の反映であるというが、この伝統は東晋ではすでに形骸化し、劉宋以降は公卿婦人が皇后の御者を務めるといふ記載が親蚕儀礼から消えるという。保科氏はこの現象を「命婦」による女性秩序の整備との関わりから捉えているが、命婦制度

の形成過程との関わりはひとまず措くとして、漢代以来の制度を支える「夫婦一体」の意識にも、西晋・東晋間では変化があるのであろう。⁽⁵⁾

思いつくまま拙い私見を述べたが、福山氏が岡村繁氏の説や渡邊義浩氏の説を補いつつ、可能性を指摘した丁廩の妻のような無名女性の創作の有無については、あつたかもしれないが、なかつたかもしれない、という曖昧な言い方しか筆者にはできない。ただ、氏の言うとおり、全く否定できるものでもない以上、さらなる検証を続ける必要がある。たとえば、福山氏が第四章で潘岳の「寡婦賦」（『文選』巻十六）が丁廩の妻の「寡婦賦」の現存する六十句のうち、三十六句（うち李善注に指摘するものは三十四句）を下敷きにしていることを明らかにしているが、丁廩の妻「寡婦賦」の冒頭の六句、「惟れ女子の行い有るは、固より歴代の彝倫。父母を辞して言に帰ぎ、君子の清塵を奉ず。懸羅の松に附するが如く、浮萍の津に託するに似たり」については、類似句があるにも関わらず李善注では直接の関わりを示さない。さらに曹丕や王粲らの「寡婦賦」にはこの冒頭に相当する教訓的な内容は含まれていない。福山氏がまとめておられるとおり、この賦の作者には異論があつて、『藝文類聚』巻三十四は「魏丁廩妻寡婦賦」とし、李善注

は「丁儀妻寡婦賦」、『初学記』巻十四婚姻は冒頭の四句のみを収載して「丁儀婦賦」とする。さらに四句めは、曹植の「出婦賦」に「以才薄之質陋、奉君子之清塵」（『藝文類聚』巻三十）として同じ句が見える。あくまで思いつきにしかすぎないが、想像を逞しくすると、「出婦賦」とも共通する句を含む冒頭四句のみを挙げる『初学記』だけを見れば、教訓的な内容は寡婦にだけ当てはまるものではないので、「丁儀の婦賦」とするのもあながち誤りではなく、そうした作が存在したとも考えられよう。初唐の文献に見える記述の違いは、誤記や誤認ではなく、「女性」を題材にした類似作品を、丁儀・丁廙が曹植・曹丕らとともに（あるいは丁廙の妻のような無名の女性も含めて）いくつも創作した結果の一つの現れであるのかもしれない。

三

次にもう一つのテーマ「少年・国家」を扱った第七・八・九章を見てみよう。第七章「曹植の「少年」」では、まず史記や漢書などの史書においては負のイメージが強かった遊侠の「少年」が、楽府などの文学テキストではその美的価値が注目されるようになっていくことを、先行研究にも

とづいて示した上で、曹植の作品における「少年」像を検証している。「名都篇」は、遊侠の少年が文学の主題として選択されている点に新しさがあるとともに、「永劫回帰・循環する少年の日々」を詠み込んでおり、「少年」は永遠に少年のままの「虚構の存在」として描かれている点に、他の曹植の作にも通ずる特徴が見て取れるとする。「野田黄雀行」においても、少年を美的形象として肯定的に描いており、「少年が雀を相手に義侠・友情を示すという物語的アレゴリーに独自性がある」とし、「送応氏」では、陥落した洛陽を再訪した曹植の感慨を詠う中で、荒廃・衰退するものと対比される「生命力や新生の象徴」として少年が描かれているとする。このように曹植の「少年」は、正と負（秩序の維持者と破壊者）の両面の価値を備えているが故に、作品の中で幅のある存在となり得ているとする。

第八章「曹植「白馬篇」考——「遊侠児」の誕生——」は、前章の「少年」をめぐる考察をふまえた上で、「白馬篇」に描かれる遊侠児のもつ意味や効果について考察している。「白馬篇」の前半は遊侠少年の私的・遊興的側面を、後半は憂国者的側面を描いており、従来の「社会秩序を超越し、個人の自立に立脚する存在」から、困難に殉じようとする少年へと変容させている（二二四頁）。またこうし

た遊侠児像が生み出されるのは、曹植が体験にもとづくのではなく、觀念の上で「国難」「国憂」を捉えるという、特徴的な国家意識を持っているからで、結果として、「白馬篇」では現実よりも理想、個人よりも典型に向かう虚構世界が創出されているとしている。

第九章「曹植と「国難」——先秦漢魏文学における国家意識の一面——」では、前章で浮かび上がってきた曹植の国家意識について検証している。まず先秦から後漢までの国家意識の諸相を検証した上で、曹植が曹操や他の建安詩人とは異なる国家意識（漢家意識）をもっていたこと、国家に殉じようとする意識は、その淵源を楚辭に求めることができるが、曹植以前の文学においては珍しいものであることを指摘する。さらに、高祖よりも光武帝が優れることを論じる「漢二祖優劣論」には、曹植の現実認識の欠如や、ずれが窺われること、「情詩」では男女の情愛に国家（漢家）の衰亡や戦乱への嘆きを重ねており、そこに国家への挽歌的な要素を読み取ることが可能であること、そもそも曹植のように国家衰滅自体を題材とするのが特異な例であることなどから、先の「白馬篇」の検証においても確認した、曹植の文学に特徴的に現れる国家意識と「国家への義侠的な犠牲の精神」を再確認する。さらにこの精神は、「慷慨」

という言葉によって表されているとする。「曹植が用いる「慷慨」は政治参加の志や国家への殉難の決意に高ぶる感情を表現し」、かつ「文筆表現に伴う心の昂ぶり」を表す例が見られることから、曹植の「慷慨」は「言説あるいは虚構の表現活動に衝迫をもたらず動因」になつており、「政治上の不満や失意のみを曹植の「慷慨」に読み取るの是一面的に過ぎる」とする。つまり「国政へのあくなき参画の志と言論の力への信頼、そして「国難」への義侠心」こそが、曹植の「文筆表現の原動力」となつていたと論じている（二六四―二六五頁）。

以上三章における氏の「少年」あるいは「国家」意識に関する分析は、およそ妥当であろうと思われるし、絶望的な現実に対しているからこそ仮想現実を設定する必要がある、だからこそより卓越した文学が創出されたという点は指摘のとおりであろう。福山氏が第九章で、曹植は近代にも通ずる国家像の典型を作り出しているとしているが、曹植の文学に時折、近代的な感覚や発想を感じるのは事実であり、それは自己実現の手段として文学創作において可能な限りの表現手法を尽くした結果でもあるであろう。

論証の内容に特段の異論はないが、読者として気になつた点に少しく触れておきたい。七・九章は一続きのテーマ

を扱つてはいるものの、もともと別々の論考であつたことから、記述に重複が生じるのは致し方ないし、福山氏自身もその点は断つてゐるが、それでもなお重複感があることは否めない。その傾向は第三章と関連した内容を論じる第四・十一章にもやや認められる。一つの章として完結してゐることも必要だが、一書として読む場合の工夫がさらにあつてもよかつたかもしれない。

また第九章で「国家への義侠的な犠牲の精神」を表現する言葉として、曹植の「慷慨」について検証しており、それに対する福山氏の分析自体には異論はないが、序章で氏は「建安の風骨」のような建安文学に関わる概念や批評語に定論がないことを、建安文学研究の問題点として指摘し、「慷慨」「清峻」「通脱」といった語も再検討を要するとしている(七頁)。「慷慨」は特に建安文学を象徴する言葉として受け止められている以上、従来の見解や曹植以外の詩人に見える「慷慨」との比較などが示されていてもよかつたのではないか。

次に、「女性・少年・国家」という本書の中心テーマからは少しそれはするが、第二・五・六・附章においても、建安文学の特質や前後の時代の文学との連接を考える上で、興味深い指摘がなされている。まずはそれぞれの内容

を確認していこう。

第二章「趙壹の詩賦について」は、趙壹の詩賦の先駆的側面を検証する。まず「窮鳥賦」をとりあげ、この賦が「後漢書」本伝でその直前に付される友人宛の書簡と同じく私信的性質を備えており、「個人的な窮状を、私的応酬の場で賦として詠むようになった」ことを示す例とする(七四頁)。蔡邕の「翠鳥」詩や禰衡の「鸚鵡賦」などと比較し、後漢末の詩人が「鳥のアレゴリー」によつて自らの姿を示していることを挙げ、特に「窮地に陥つた詩人の内心の震えを、粗描ながら窮鳥の形象に表現しえた趙壹の手法は、この時代にあつて特筆すべき」であり、「魏晋の詩人達の描き出した飛翔のメタファーに連なるという点で意義がある」とする(七六頁)。

また体制を批判し、士人の不遇を嘆く「刺世疾邪賦」については、賦中に「秦客」詩と「魯生」歌の二篇の五言詩が詠み込まれているという点に着目する。賦中に詩を詠む例は趙壹以前にもあるが、詩経や楚辭型の詩であり五言詩ではないことから、五言詩が先に挙げた張衡の作や楽府などの情詩とは異なり、「賦と同じように士人一個の内面を表白する様式となつていくことを端的に示しているという点で、詩史上の意義がある」とする(八一頁)。氏は趙壹

のこの二作品から、抒情的な賦と詩との間に大きな距離はなかつたことが窺われること、抒情的な五言徒詩は必ずしも樂府歌謡のみを淵源としているわけではなく、抒情小賦から抒情詩へとという別の展開も想定される可能性を提示している。

第五章「曹操「十二月己亥令」をめぐって——文学テクストとしての「令」——」は、政治的言説として受容されてきた曹操の散文テクストについて、その文学性と後漢末・建安文学における位置付けを、曹操の散文の大半を占める「令」という文体を対象に考察している。

まず建安年間に三度布告された「求才三令」をとりあげ、そのいずれの令にも強い修辭性が窺われることや、先行研究によれば、この令は人材選抜のための令としての実効性がなかつたとされることから、「書きたいことを書きたいように書いた」ものであることを指摘する。その上で、建安十五年（二一〇）に布告された「十二月己亥令」を採り上げ、この一文は、前半は政權内外に自らの立場を弁解しようとする意図をもって記されており、「簡潔な物語性、私的感慨や告白スタイルをも」った自伝的内容であるのに対し、後半は国家篡奪の野心があると誹謗中傷する者に対し、その意志がないことを典故や故事を用いて弁明する内

容であり、前後半で書き方が異なる点を氏は指摘する。そしてその違いは曹操によって意識的にもたらされたものであつて、この令は、「命令的指令的言語である以上に、含意性の高い言語である点にこそ、その特質を見るべき」だとする（一五八頁）。またその根底には、「様々な言説によって肥大化していったであろう曹操像に対し、表現の位相において「等身大」の自己を取り戻そうとする、曹操自身の試み」が存在するのではないかとしている。

第六章「曹植の四言詩について」は、曹植の「責躬詩」「応詔詩」「朔風詩」の三篇の四言詩を分析し、その特徴を明らかにしている。文帝曹丕に捧げ、自らの窮状を打開しようとした「責躬詩」は、直接的には前漢の韋玄成の「自劾詩」をふまえ、前半の二十八句までは曹操、曹丕を称えているが、二十九句目以降の後半は自らの境遇を中心に詠じている点を挙げ、「公的・教訓的な漢代の長篇四言詩をふまえつつ、そのような伝統様式とはむしろ逆に、曹植という個の心理・葛藤や激情を詠出」している詩であることを指摘する（一八八頁）。同じく曹丕に献呈した「応詔詩」にも、詩経の句に独自のひねりを加え、より先鋭な対比に置き換える手法を採用したり、曹植の五言詩に特徴的な写景句を詩の冒頭に置く技法を四言詩にはあえて採らず、詩

経に特徴的な修辭法（興やリフレイン）を意識的に忌避したりする傾向が見て取れるとする。一方、上記二篇のような献呈詩ではない「朔風詩」には、「四言独特の簡直な言い回しや文脈の屈曲、抽象的・象徴的な叙述」がかえって見られることを指摘し（一八八頁）、曹植独特の手法をあまり出している。

附章「嵇康の「述志詩」——建安文学の集成として——」は、「正始に連接する建安の文学の様々なテクストが織り込まれた作品」である嵇康の「述志詩」を中心に検討を加えている。「述志詩」第一首は、身を潜めて時を待つ「潜龍」、天空を翔る「焦鵬」、その飛翔を阻害する「網羅」といった複数のメタファー、それによって形成される構図から、「過ぎて峻切を為す」（『詩品』）と評されるような嵇康の峻烈な意志の力が喚起されるという。「潜龍」「焦鵬」のモチーフは、曹植の「言志」詩をふまえており、「焦鵬」と「網羅」については、直接の句作りは曹丕の「善哉行」を、イメージは何晏「言志」詩を意識しているとする。また積極的な超俗の意志は仲長統の「述志詩」に通じるものがあり、さらに仲長統がふまえたと思われる後漢末の酈炎「見志詩」にも飛翔が描かれており、嵇康とは直接の継承関係は見られないものの、酈炎から建安詩人を経て嵇康に至るまでの

飛翔のイメージには通底するものがあるとする。

また志を表明する内容をもつものは、漢代は詩だけでなく賦に多く見え、「述志詩」はいわゆる屈原以来の賢人失志の賦の内容とも重なっている。詩と賦が近かった漢代の文人は賦作の成果を詩作に生かしているが、西晋以降、詩と賦が弁別されるようになると、本来賦が詠じていたこの種のテーマは詩作の対象から外されていくという（三六三頁）。こうした点をふまえると、酈炎から嵇康までを賢人失志の賦に淵源をもつひとまとまりの作品群として括り、嵇康「述志詩」を「建安文学の一集成」と見なすことができるとしている。

第二章と附章は前後の時代の文学と建安文学との連接という視点から考察を展開したものと見えよう。たとえば、第二章の趙壹らの作に見える「鳥のアレゴリー」は魏晋の詩人の飛翔のメタファーに繋がるという指摘や、あるいは附章の酈炎から嵇康までの志を表明する詩には通底する飛翔のイメージがあるとの指摘はそのとおりであろう。ただ、第二章について言えば、趙壹の賦が賦中に五言詩を挿入する点で形式的に新しい要素を備えており、士人の内面を表白する内容をもつといった「文学表現の画期性」については首肯できるが、民間歌謡だけにとどまらない、「抒情小

賦から抒情詩へ」と展開する「士人の五言詩が形成・確立する道筋」については、いまま少し説明を要するように思われる。賦中の詩歌に、従来見られた詩経型や楚辞型ではなく、より説得的、効果的な手段として五言詩型を趙壹は採つたのであろうが、その時点で趙壹にとつての五言詩はどういうものであったのか。これは、柳川順子氏が精力的に論じている古詩群の成立の問題なども絡めて、さらに検討されるべきものであろう。また、後漢末・建安時期の詩と賦は大差のない内容を詠むようになる傾向があることは指摘のとおりではあるが、それでもなお詩と賦とを詠じ分けており、結局彼らは両者をどう捉えていたのかも気になるところである。

第五章の曹操の散文、第六章の曹植の四言詩についての考察は、いずれも伝統的なスタイルを超越した表現法を曹操、曹植とも創出した点を指摘しており、興味深い。ただ、第五章について福山氏は「散文史への位置づけは別の課題」と断っているけれども、欲を言えば、「令」に限らず、曹操の散文には同じようなことが言えるのか、また曹植の「書きたいことを書きたいように書く」文学を継承した曹植やその後の散文作品との関わりなどについても、建安文学とその後の時代の接続を考える上で、ひとこと言及され

ていてもよかつたのではないか。

後漢や正始の文学と建安文学との接続や、建安文学と女性との関わりなど、従来看過されてきた問題についての検証を試みた本書には、示唆に富む見解も少なくない。以上の外れな意見に終始したかもしれないが、気付いた点を思いつくまま挙げることで評者としての責めを塞ぎたい。

（汲古書院、二〇一二年三月刊、
三八〇頁＋十六頁、一・一〇〇〇円）

注

- (1) 保科季子「漢代の女性秩序——命婦制度淵源考」(『東方学』一〇八、二〇〇四年)。この論の前提となる皇后の權威が後漢初期に確立されたことを論じるものとしては、保科季子「天子の好逮——漢代の儒教的皇后論」(『東洋史研究』六十一、二、二〇〇二年)、金子修一「中国古代的皇后之地位」(『中国史研究』二〇、二〇〇二年)がある。
- (2) 前掲保科氏「漢代の女性秩序——命婦制度淵源考」三十九頁。
- (3) 従来は皇帝あるいは男性に限られていた諫、哀策、碑などが、後漢以降、皇后、公主あるいは女性に対しても書か

れる例が見られるようになるのも、「夫婦一体」の理念のひとつの現れであろう。

(4) 前掲保科氏「漢代の女性秩序——命婦制度淵源考」
二十二・二十三・三十一頁。

(5) たとえば大平幸代「女と門風——『世説新語』における話柄としての妻」(『ジェンダーからみた中国の家と女』、関西中国女性史研究会編、東方書店、二〇〇四年)で分析されているように、東晋以降の夫婦関係については、妻が実家と婚家の家門の力関係を背負う形で現れる例もあり、従来とは捉え方が変化していることはここからも想像される。

(6) たとえば、少し古いものにはなるが、後藤秋正氏の「曹植における慷慨について」(『語学文学』十六、北海道教育大学語学文学会、一九七八年)などがある。

(7) 柳川順子『漢代五言詩歌史の研究』(創文社、二〇一三年)。